週刊 経済時事

発行所
平市八幡小路32
経済時事社
主幹　田原登
電話（呼）4874
毎週　土曜日発行
定価3ヵ月　百円

## 平市の實力養成へ

# 短大創立が優先

### 諸橋市長構想　公約の実行へ　積極化

平市は諸橋市長の三選が成って選挙に公約した人事の刷新と機構の改革、公営バスの運営などに着々乗り出した。早くも伊藤助役は辞任し後任に樋口正氏（五二）が去る十二日着任したので、それだけでも多少清新な空気が入った感じがあるが、近いうちに部長級の市民室長の新設や老朽の陶汰など大刷新を断行する模様である。過去八年の間諸橋市長の治績は草野、永井、高久、豊間との合併、前市長時代につくった派閥の対立感情から暗い空気に包まれていたが、諸橋市長の屈托ない明るい円満な性格が市政に反映して対立感情が一掃され明るい空気となったことは平市今日の発展を見た大きな収穫であった然し四月の激しい市長選から一部に感情のもつれを醸成したが、然し肝心の市議会には大した影響もなく議会の運営は円滑に行くようである。三選された最後の事業として諸橋市長の構想は上荒川に廿万平方メートルの公認野球場五十メートル公認プール、テニスコート六面を三年継続事業として一億三千五百万円を投じ造ることとし、野球場は今年工費三千七百万円で既に着工した。このほか五市合併に備え大市庁会の建築、短期大学の創立などを目論んでいるが、市の実力を築く必要が先決であり、そのためには短大の設置が優先的に解決して行き度い意向で、大泉議長らもその方針で進むべきたとしており、またこの短大問題は五市長会、町村議長会、平商工会議所、県下市長会その他の関係機関もその促進方を先に決議して居り、世論はこれに同調しているものと見られ、また相双地区の関係団体も賛成している模様なので近く「短大期成審議会」のような機関を設置し研究に着手することになった。また五市合併が台頭しているので平市はその指導権を掌握するためにも短大の設置で実力をつけると同時に大市庁舎が必然的に必要となって来るのでこれが解決え努力する計画を樹てゝいる、まだその具体的な案は出来ていないがこの四年間の在任中には必ず実現を期す方針で選挙に公約した諸案件の実行に全力を傾注する方針である。

## 発刊のことば

主幹　田原　登

わが郷土石城は輝やかしい将来が待っている。それは何か。云うまでもなく総合開発事業の完成である。だがその完成はなかなか容易ではないようだ。然しそれをやりとげなければならぬ。そのためにはこの仕事の一ツの推進力ともなる報道機関なら、いくら多くあっても利益こそあれ有害とはなるまい。

何らの開発もなく殖える人口をどうする術もなく天を仰いで長嘆息する地方も県下には沢山あるようだ。それに比較するとわが石城は恵まれたところである、そしてこの事業は既に始まっている。だがわれわれは手離しで喜んでばかりはいられない。悪く云う者は恐らくこの事業は一片の夢物語りに終るであろうとさえ云う。それほどいろいろな面で事業の前途は困難を思わせる。

だからわが石城人はこの楽しい夢の実現に全力を傾注しなければなるまい。事業遂行に必要なら五市合併も急速に進める必要がある。人の和を図り英智をしぼり、理解を深めて話し合えば五市合併もそうむずかしいことでもあるまい。

わが社は小型の週刊紙ながら総合開発事業の一ツの推進力となりたい。また新聞の倫理を重んじその使命に徹して不偏不党、厳正中立を守る。批判すべきものに対しては苛責ない批判を加えわが郷土の社会正義を守り度い。生活につながる地方経済の動きや解説をし、時事問題を深く堀り下げて社会の実相を知らせ、もって郷土紙として愛される誇り高きものとしたいのである。読者諸賢の御理解と御協力を切に願う次第です。

**筆者新聞歴**、時事新報、報知新聞、台湾日日新報、いわき民報の各新聞記者

## 妥当な賃金の制定

### 最低賃法、十日から実施

注目されている最低賃金法は愈よ来る七月十日から実施される目的は労働条件の改善を図り低賃金者の生活の安定に寄与するものであるが、同法が実施されたからと云って直ちにその最低賃金が決るワケではない。

平労基署管内の当該事業場数は三、四〇〇、その人員五万一千人でこのうち百人以上を使用する事業所は五十二カ所だが、同署では同法の主旨徹底へ啓蒙宣伝を行ない、その後に業種別、地域別に業者間で妥当な賃金を決め県の最低賃金審査会にかけて制定することになっている。この審議会は労働者、使用者、公益者の三者から各五名の委員計十五名を出して構成するが、その人選には早くも自選、他選で活気を見せている。同署管内では四倉セメント瓦製造協組（三十二人）では昨年五月から実質的に最賃法を実施しているが職種別に初任給を次の様に決めている。

▽成形工三五〇円、仕上工一七〇円、雑役一五五円

この賃金決定は使用者側の支払能力の有無も考いなければならないし労使双方の条件が一致しないのでなかなか面倒な問題が起ることを予想されるため、性急には決定出来ない模様で平労基署ではあらゆる角度から検討しゆっくりと妥当な線を打出して法の精神に遵うよう指導する方針をたてゝいる。

## 仲よし労使へ

### 労働問題懇談会を結成

労使が衝突ばかりしていたのでは産業の破滅は火を見るより明かなので労使相互の健全化を図るため去る二十三日に石城地区労働問題懇談会を平労政事務所で開き結成した。構成は労使双方から各八名の代表と学識経験者三名で会の運営方法や労働施策の計画などを協議した。当日選出された委員は左の通り

◇労働者側＝生田目清（常磐指導部長）鎌田春治（小田組合長）田綱康雄（常磐交通書記長）石附重吉（呉羽化学委員長）鈴木清（磐城セメント支部長）岡田光雄（電労平分会委員長）

◇使用者側＝横内勇（片倉製糸管理長）福永芳太郎（品川白練瓦労務課長）渡辺正（呉羽化学労務課長）寺岡正一（日水労務部長）小野信一（小名浜臨港総務部長）長谷川盛太（昭和工業四倉作業所々長）高橋幹夫（小名浜運送事務員）

◇学識経験者＝草野四郎（平商工会議所専務理事）

## 夏期社会大学開く

県教委、石城教委連協主催の第十四回夏期社会大学は七月廿五日から三日間平市公会堂で開く受講料は大人三十円、学生二十円、講師演題左の通り

▽二十五日「国際政局をめぐる日本の経済」早大教授堀井忠勇▽廿六日「夫婦の愛情と女性の幸福」サンデー毎日編集次長松田ふみ子▽「現代女性はどう生きるべきか」東大教授堀秀彦。

## 危険な水泳場所に立札

水の恋しい夏は訪れて早くも水の犠牲者が続出して来たので、これを防ぐため平署では危険な場所にこどもの水泳禁止区域の立札を十五カ所に建てることになり廿九日から実施することになった。設置場所は豊間二、四倉四、下好間二、草野一、飯野三、平窪五

## 六二戸建設

### 平の市営住宅

平市では本年度の市営住宅六十三戸を建てる、十一月完成予定この外県営は十四戸建設される

▽六人町廿戸▽七軒長廿一戸中平窪十戸▽道匠小路五戸▽胡麻沢六戸。

題字は佐々木坡唐氏書

**謝恩会開く**　大正八年度平一小卒業生の〃八正会〃では去る廿二日夜、新川町正月荘で総会を開き、卒業期担任渡辺善吉、高等科担任太平喜一郎、教頭大塚三善の三先生を招き謝恩会を開いた。

## 発刊を祝う

伊藤正徳

新刊慶祝、小なりとも、自分の良心を満足させる紙面を制作し得るのは倖せです。倦まずに御勉強を祈ります。

時事新報時代に地方部に居た君の活躍は将来を期待されていた。よく新聞の倫理を重んじ円満な人格と豊富な常識とは記事にも穏健中正となって現われたので読者の信用を得新聞の声価を高めた。あの当時の意気を大いに発揮されれば一段と信用を博し得られるものと思う。

註伊藤正徳氏は元時事新報編集長、現在産経新聞主幹で筆者（田原）のため祝辞を寄せられたもの。

**作伸会書道展**

平市旧城跡二七久野富喜氏方作伸会主催の第七回作伸会書道展は来る十八、十九、廿日の三日間平市公会堂で開く。審査員は佐々木坡唐、野口春水、東京の安藤摺石、中台青陵の四氏のほか教育部秋山碧湖氏ら廿五名。

# 祝　週刊経済時事発行

## 平市役所

市長　諸橋久太郎
助役　樋口正
収入役　根本益利

## 平市議会

議長　大泉信雄
副議長　志賀季三郎

総務委員長　金坂小花町松志大佐石諸和宮志鈴大渡鈴木国箱塩小中塩矢上強四
副委員長　和

文教厚生委員長　古野本沢田賀本田川山橋貝内賀辺木泉藤木子部藤田辺井崎野野本吹坂口家
副委員長　

経済委員長　栄政久亀都兼夫吉一正勘季喜良栄信隆幸寅源次一松友隆一善二演昌大一
副委員長　

建設委員長　登一郎広治郎実平治次郎郎三郎一郎平一雄衛寿男雄郎六郎郎昇美勝造秋英蔵昇郎雄郎
副委員長　通

# 輸入防止に大きな貢献

## 光学レンズ研磨剤を完成

### 学界驚異の東北金属化学

平市正月町第三小学校西裏と鎌田の二カ所に大きな酒樽を沢山並べてこつこつやっている小さな町工場。「何を造っているだろう」と首をかしげる人は少くない。この工場は東北金属化学研究所（所長鈴木新兵衛氏）で、従来日本では出来なかった光学レンズを造る薬品の研究に成功し、独逸や仏蘭西から輸入していたのを輸入を防減することが出来るまでになった。金属化学界の最高の水準を行く日本金属化学界驚異の研究所である。（写真は鈴木所長）

この研究所は鈴木所長が引揚者で、さきに台湾や満州でライター石を製造していた技術を生かし裸一貫でライター石製造工場を新設、貿易品として南洋方面に輸出、外貨獲得につめる一方金属化学のいろいろな研究に着手して来たが、その中でも光学レンズの中に入る薬品のランタンやトリーム、レンズをみがく研磨剤のセリーム、色ガラスを造るに必要なネオジウムの製造に成功した。しかもその研磨剤のセリームは世界最高を以って自他共に任じているドイツのザイス社の製品に匹敵する良質なものと認められるに至り、製品は日本光学が一手に引受けている有様である。現在従業員は五十名ぐらいだが外国製品と競争して価格の点でも引合う自信を得たので工場規模を拡充する予定を樹てている。

原料はモナザイク鉱石で南洋、印度、マレー等から輸入しているが、この原料からセリーム、ランタン、トリーム、ネオジウームなど総合的に生産出来る工場は国内ではこの研究所だけで斯界に有名な大阪の三徳工業、近代化学、京都の新日本金属も未だ総合生産の域には達していないといはれ、東北金属化学はその点で郷土が生んだ日本一の覇者となったワケである。

鈴木所長は天才肌の人で台北市に在ったころは生薬屋という土産品を売る大きな店をもっていた。日本が台湾流治にあたった当時、台湾にはバナナや砂糖、塩などのほか土産品がないところから種々苦心研究の上、ヘビの皮で帯止め、ガマ口、草履、水牛の角の花さしなどいろいろのものを造りいまも台湾産物となっているほか、風が吹いていても火が消えないヒモ付ライターなどを考案した発明家である。今度完成した光学レンズ用薬品の製造には京大出身の長男弘君（三三）旅順高工出身の次男忠君（三〇）が何れも理工科を収めた秀才揃いで父子三人共同の苦心研究が実を結んだものである。またこの研究の論文を提出すれば工学博士の学位は獲られるがまだ提出していない。

なお鈴木所長はライター石（発火合金）の製法は昭和十九年大連在住中旅順工大の工学博士井沢猛三郎教授の指導を受け完成したものである。また石炭増産に必要なセル鉄を製造供給し満州国政府から表彰されたこともある。

---

現実主義の人があまりにも多い今の世にも奥床しい人もかなりあるが、その中でも釜屋の会計さん本名諸橋元三郎氏は珍しい存在である。白髪の童顔、人なみはづれた巨体をひっさげていつも和服、その為か相撲取りと間違えられることもあると云う。金とヒマが出来ると普通のダンナは二号をかこったり、ろくな遊びはしないものと相場が決っているが、会計さんはそんな低級な遊びには興味はない。天地自然の相を現わす〃水石〃に自ら水を与えて無我の境地に入る。ほのかににおうインクの香りをかぎながら毎日の如く送ってくる新刊書に一通り目を通し〃三猿文庫〃に廻す、この二ツの遊びは心身を豊かにし何にもまさる楽しみなのである。

## 真のリベラルスト

### 諸橋元三郎氏

日蓮様の仏道を守っているのだと云うことだが本尊はそんな固苦しい話は一向にしない。自ら凡俗を装う。それでいて時代の動きを知る明敏さがあり、ニュースのキャッチ養から自己を研き上げた結果がこうした高級な趣味、奥床しさが自然と湧いて出るのであろう。

茫洋として春の海の様にゆったりとしていつも変らない名誉欲など全然ないし、趣味の会でも会長にはならない。その責任にしばられることをいやがるのである。何ものにも束ばくを受けない自由を欲しているのだ。民主主義に徹した真のリベラルストと云うことが出来よう。

郷土出身者を愛し所謂文芸人や実業人が陰ながらこの人のお世話になっている人がたくさんある。蓄財の賢明な消費である。これがやがて有形無形に報恩感謝となって返ってくる理屈である。兄久太郎氏が三選市長になったのも賢弟元三郎氏の陰然たる潜勢力があった為だろうといわれる

---

# 県下一の大病院に

## 共立病院目覚しい躍進

内郷市に去る廿五年十一月に創立した磐城共立病院（五市七カ町村で設立、院長畑山靖夫博士）は当時僅か五十床の小病院であったが、患者が増加する一方なので病室の増築工事を急ぎ、拡張に拡張を重ね現在六百七十五床となり外来患者毎日三百名で県下第一であり、東北でも屈指の大病院となった。医病陣は畑山院長ほか十九人。内科、外科、呼吸器科、婦人科、歯科、耳鼻咽喉科、精神科を設けることにしている。病棟は木造建築であったが不燃焼の永久性本建築に目下建替中であり更に増築を目論んでいる。

これに伴うあらゆる施設を整備してあるが、目標は完備せる総合病院にしたい方針で、今後は眼科、

---

# 心臓診断機を輸入

### 日本で二台目、心臓患者に福音

心臓を精密に診断出来る〃四誘導心電計〃というのが磐城共立病院に七月末アメリカから入ることになった。この診断機は日本では東大医学部に一台入っているだけで、これが設備されると日本で二台目の珍しいもの。従来心臓を診断する正確な機械がなかったためこれが施療には頭痛のタネであったが、この〃四誘導心電計〃によって明瞭に診断が出来るので心臓患者には福音となる、なお同機械は三百五十万円である。

---

## 暑中ハガキ

### 一日から売出す

暑中御見舞用の郵便はがきが七月一日から局の窓口で売出される平局には石城、双葉両郡内の割当が昨年よりも四万枚多い十三万六千枚入っている。今年の図柄は熱帯魚と朝顔の二種類。

---

## 六月平市会

平市議会は来る三十日から開かれる。こんどの市会は去る五月の臨時市会で承認された樋口助役が初めて出席する。

---

# 二宮尊徳の遺訓 ①

## 高慶との豆問答

相馬藩士の富田高慶は、江戸の聖堂（昌平校）で、十年も儒教を学んだ人であるが、無理な勉強をしたために病気になり、芝の巴町の磯野弘道という医者に通っていた。患者の少いときには富国安民ということについて、磯野と論難したということであるが、あるとき磯野の門人で、野州真壁郡小栗村加草の出身である奥田幸氏から「おまえさんはしきりにおのれの師匠とするに足る人物がないといわれるけれど、私の国にはこのごろ二宮金次郎と云うえらい人が来ておって、宇津家の領地の村を立直しているが、この人ならばおまえさんの先生には十分でしようなあ」といわれたので、高慶はさっそく、所持せる書物を売りはらい、それを旅費として天保十年六月の四日に野州の桜町に着くや、彼に面会を求めたところが彼のいわれるには「聞けば江戸の学者だそうだが、わしは百姓である。百姓が学者に会ったとてなんの益もなかろう」と、きっぱりと面会をことわった。

しかし高慶を彼に取りついだ太助は気の毒に思い、高慶を自分の家に寄宿させ、しばらく時のくるのを待たせておいた。そして高慶は学問があるので、近所の若い者を集めて塾のようなものを開き、腰をすえて彼への入門がかなえる日を待った。かくして人格の高い上に学識もある高慶のことであるから、このことが村の評判となり、ついに彼の耳にも達し、九月の末に入門を許された。時に高慶は二十七才であった。この時の初対面の話がなかなかおもしろい。

高慶が彼の前に出ると、彼はいきなり「あなたは学者がそうだが、豆という字を知っておられるか」「心得ております」「じや豆という字を書いてご覧なさい」といって、彼は門弟に紙と筆とを用意させたので、高慶は豆の字を達者に書いた。ところが金次郎は「あなたの書いた豆は、多分馬も食いますまい」といいつゝ、門弟にいって倉からひとつかみの豆を持ってこさせていうことに、「わしの作った豆は馬が食いますぜ」といって高慶の前に置いたのである。これによって高慶は、ただ学問や理屈だけでは、天下を救うことも、実生活をよくすることもできないことや、誠意と実行の大切なことを悟り、爾来、裸一つとなって彼の下に学びつつ、ついには彼の高弟となったのである。

祝　週刊経済時事発行

諸橋電気株式会社
平市五丁目二二
電四一五一—四一五四
市外専用（専用九）

（営業品目）
家庭金物　ビニール製品
建築金物　セメント
機械工具　ヒューム管
度量衡　板ガラス
銅器美術品　工業用ゴム製品
一般鋼杉　ローラー及コンベアチエン
鉄鋼二次製品　電動工具
非鉄金属　電機修理
鋼索　其他一般

釜屋
諸橋合名会社
平市五丁目六
電四一五一—四一五四
市外専用（専用九）

（営業品目）
モートル　絶縁材料
トランス　配電材料
扇風機　冷暖房装置
電気冷蔵庫　鉱山機械
電気掃除機　ラジオ真空管
電機ポンプ　テレビブラウン管
ホイスト　電動工具
コンデンサー